

研究資料

福井県法雲寺蔵の岩佐又兵衛関係文書

辻 惟 雄

ここに紹介する資料は、一九六二年秋、筆者が岩佐又兵衛に関する資料を求めて福井市を訪れた際、福井県立郷土歴史館長谷口初意氏の御教えによって、丹生郡越廼村大味の法雲寺において見出したものである。

内容の紹介に先立って、まず法雲寺の歴史を記しておく必要がある。日本海に面した漁村にあるこの寺は、現在知る人こそ少いが、その前身をたどると真宗高田派の本山たる下野国（栃木県）高田専修寺にあたる由緒深い寺であって、現在高田派の本山となっている伊勢（三重県）一身田の専修寺との間で、法嗣をめぐる永年にわたる論争を展開し、その結果敗れて止むなく真宗大谷派の末寺となり現在に至っているものである。この法嗣争いの経過は、ここに紹介する文書の内容とも深い関係を持つので、「専修寺史要」（明治四十五年高田派専修寺文書部発行）などを参考に少し触れておく。

紛争の発端は、高田専修寺の第十世真慧上人が、実子応真があるにかかわらず、教団の基盤の強化をはかって、後柏原天皇の第二皇子常盤井宮を第十一世の法嗣真智上人として申請けたことに始まる。真慧上人は、専修寺を下野国高田から伊勢一身田に移し、永正九年ここで亡くなるが、それを契機として高田派門徒の中でかねて対立関係にあった伊勢派と加賀・越前・三河派とが、前者は応真を、後者は真智上人をそれぞれ擁立して抗争するようになった。永正十六年応真が一身田に入ると、真智上人はこれを避けて三河から越前に至り、坂

北郡熊坂に別に専修寺を建てた。天正十三年、真智上人が没して後も専修寺正統論争はなお止まず、越前・三河側は朝廷幕府に訴え、又は諸将の間に運動を試み、その正統であることを主張した。寛永十一年熊坂から丹生郡畑中に移っていた専修寺の真能・真教父子が幕府へ訴え出、同年閏七月二十日板倉重宗の邸で対決、その結果は真能・真教側の敗訴となり、両人は追放、その門末寺は皆一身田専修寺の末寺たることを命じられた。だが、真教はその後も畑中において勢力を保ち、一身田側と対立を続け、寛文三年、両者は再び対決、その結果、真教側はまたも敗れ、ここに及んで止むなく大谷派に帰参してその末寺となり、法雲寺と改め、貞享三年現在の地に移った。

このようないきさつを持つ法雲寺であるから、寺の由緒を明らかにする寺宝（親鸞直筆の「尊号真像銘文」を含む）や古文書の類は大切に伝えられ、現在新造の宝蔵殿に収まっている。ここに紹介する文書（挿図1）もそのうちの一つであって、縦二五厘、横三七・三厘の半紙横三枚継ぎの巻紙にしたためである（全文は文末に附す）。この文面は、寛永十年拾月廿八日、当時畑中にあった法雲寺の前身である専修寺が、その末寺である西光寺、専福寺^{註1}の名義で当時の越前藩主松平忠昌に提出した目安の「跡書」すなわち案文と推察できる。内容は当畑中専修寺が高田派の本寺としての正統な由来を持つことの根拠をのべ、一身田側の主張の不当なことを力説し、この旨一身田側へよろしく御返事を願いたいという主旨のもので、一身田側が福井藩に目安を差出して真能・真教側を非難したことに對する陳状と思われる。こうした文書による論争が更に発展して、翌寛永十一年の江戸における両者の対決となったわけであろう。

この文書は、従来一身田側の資料にのみよっていた紛争の経過の実情を知る上でも興味深いものと思われるが、とくに美術史家の興味をそそるのは、末尾に「筆者岩佐又兵衛」とある点である。これは当日安の作成に当って右筆役を勤

めたのが岩佐又兵衛であることを意味するものにほかならない。「筆者」というのは当時にあって右筆のことをさしていたからである。^{註2}全文一筆で書かれたこの文書の書体は伊東卓治氏の御教えによると、唐様が強く、慶長から寛永にかけての禅僧の遺墨によく見かける筆癖を持ち、その特徴から見て、年記通り寛永十年頃の筆として差支えなさそうである。すなわち、この控えは、書風からいって後世の写しでなく、寛永十年、目安の原文が忠昌に差出された当時のものと解釈できる。それ故この文書は、岩佐又兵衛の越前在任時代の動向を示す直接資料として注目されるのである。

福井 法雲寺蔵

ここで、参考までに、岩佐

又兵衛(一五七八—一六五〇)の越前在任時代の事蹟についての、これまでに知られている資料の主なものを列挙すると

①「廻国道之記」(挿図2)

は、年記、署名を欠くが、その内容から推して、又兵衛が寛永十四年(一六三七)に、福井から京都を経由して江戸へ向った折の自作の道中記と考えられている。また、文中に「はたとせあまり越前といふ国へくたり」とあるのに従うと、彼の越前滞在が約二十年間であり、福井に赴いたのが元和初年(一六一五年前後)ということになる。

②「遠碧軒記」(延宝三年一六七五)に「憂世又兵衛は荒木撰津守の子にて有り之、越前一白殿御目かけられ候而、江戸に住候、福富玄意この事よく覚え候」とある。

③「英一蝶自畫四季繪跋」(古画備考所載、一蝶と署名あるところから、遠島先より帰郷(一七〇九)後のものと考えられる)に、「近頃越前の産岩佐の某となんいふもの……」とある。

④「岩佐家由緒書」(享保十六年一七三一)に「信雄亡之後漂泊寓居於越州福井^ニ其名^{ナリ}弥籍甚」とある。

⑤「越前人物誌」(福田源三郎著、明治四十五年刊)に「寛永年中、福井の真宗本願寺派興宗寺心願師本山の執務たること年余、勝以と交り親しむ、その帰るに臨み勝以を拉し自坊に住せしむ。美人観桜の図及び杉戸並に屏風を画く。勝以斯境の静閑なるを愛し、再び帰京するの意なし。従って心願の周施、家老の紹介により福井藩に仕へしむ。されど故あって絵師としては召抱へられざりし」とある。この典拠は不明だが、内容からして、恐らく興宗寺の寺伝に従っ

挿図2 廻国道之記 部分
(越前人物誌所載)

たものと考えられる。^{註4}

⑥「金谷屏風」といわれる

「碧勝宮図」の方印を持つ六曲一双の押絵張屏風(現在は各図掛幅として分蔵)は、福井の豪商金谷家が松平秀康の子直政を養育した功により授かったという伝来を持つ。^{註5}

書文衛兵又佐岩 図1挿

⑦又兵衛の子勝重およびその子孫が代々福井にあったことは諸資料によって明らかであり、福井の岩佐家には「廻国道之記」「書簡」「由緒書」「自画像」など又兵衛関係の資料が多く伝えられていた。

これらの資料によっても、

又兵衛に福井在住時代があっ

たことはまず疑いない。その時期の下限は、「廻国道之記」によれば寛永十四年(一六三七)であり、上限は同じく「道之記」によれば元和初年(一六一五前後)ということになる(但し「由緒書」は、信雄亡之後、すなわち一六三〇年以後とし、「人物誌」は寛永年中(一六二四〜)とするが、「道之記」の方に直接資料としての信頼性をより多く認めたい)。だが、この長期にわたる福井滞在時代における又兵衛の消息について記録した直接資料はこれまで見出されていない。その意味でこの法雲寺で発見された文書は、内容こそ又兵衛自身の生活に直接関係のあるものではないが、彼が寛永十年に福井にあってこのような寺の法嗣争いに一役買って出

ているという事実を示すものとして興味深い。さらにまた、この文書は、次のような筆蹟の検討によって、又兵衛自身の筆になるものであることがほぼ間違いないと思われるのである。

この文書(以下法雲寺文書と称する)の末尾に「筆者岩佐又兵衛」とあるのは、前に述べたように、この目安の右筆役を彼が勤めたということを示すものであって、この案文自体も彼の筆になるもの、と判断する根拠にはならない。しかしながら、又兵衛が、忠昌に提出する目安を作製した際、寺側の記録のためにこのような略式の案文を残しておいた、という可能性は考えられてよいだろう。そして何よりも筆蹟の検討がそうした可能性の可否を決定するであろう。

又兵衛の筆蹟をうかがう為の資料は非常に乏しい。私の知る限りでは、第一に、有名な水墨の歌仙双幅「人麻呂・貫之像」の歌賛及び署名、第二に、熱海美術館蔵の自筆書簡、第三に、現在米国にあって所在不明の「廻国道之記」の三つしかない。^{註7}伊東卓治氏の御意見を参考にしつつ、これらの筆蹟を検討して見る。

第一の「人麻呂・貫之像」(挿図3)は、おそらく宴席の折での酔筆かと思われるほど、即興性と奔放さを持つ画であるが、その歌賛と「勝以筆」の落款とは明らかに同一筆であり、とくに、歌賛の運筆の特徴が人物を描く筆線の運筆の特徴と完全に一致するところから、この画の賛と落款を又兵衛の筆蹟と見ることに間違いはない。その書風は、酔筆ゆえか運筆にやや乱れが見られるが、唐様の強い達筆であり、特に、近衛三藐院の粗放な書風の特徴を摸している点は注目してよいだろう。しかしながら、このかなり気取った書体は彼の日常生活における筆蹟を知るための手がかりとしてあまり適当とはいえない。

第二の「自筆書簡」(挿図4)は、内容から推して又兵衛晩年の江戸住いの時代のものと考えられる。これは、唐様の粗放な筆致で書かれた人麻呂貫之像とちがって、御家流の要素が強い柔い筆致で書かれており、その差異は一見したところ同一人の筆とは思えない程である。又兵衛の筆蹟の基準を定めるとい

問題は、この二つの筆蹟の比較という段階において、すでに困難に出会っているわけである。

そこで、この歌賛と自筆書簡との直接の比較という課題を一応留保して、この両者の間に法雲寺文書を置いて見た場合、どのような結論が出るか検討してみよう。まず、文書と、自筆書簡とを比べて見る。この両

者は一見して明らかに同一筆と認められるほどには似ていない。筆様にも和様と唐様との相違がある。だが、一方は書簡で、他方は文書の案文であること、文書は寛永十年であり、書簡は内容から推して彼の最晩年に当るものとすれば両者の間に十五年程の開きがあること、を考慮に入れつつ、この両者の筆蹟を詳細に比べてみると、やはり、同一筆蹟として解釈するのが適当な、多くの共通した要素を認めることが出来る。第一に「岩

佐又兵衛」と書かれた書体を比べて見る(挿図5)。両者の書体は少し違うが、この場合、書簡の方が、花押を伴った署名であるのに対し、文書の方は、そうでない点を考慮せねばなるまい。むしろ「岩」という字の中の「𠂔」の運筆が全く一致している点に注目すべきであろう。それから、文中の同一字句の比較を行なうと、挿図5の如く、極めて共通した筆癖を持つている。この場合、同

一時代の書体として共通する要素は、むしろ除外せねばならないが、ここに掲げた「于今」「思召」「次第」「不参候」「我等」「存候」という字句の筆癖の類似など、同一人物の筆蹟として考えるのが自然であろう。

一方、人麻呂貫之像の歌賛と法雲寺文書とを比べて見る。唐様の強いという

熱海美術館蔵

人麻呂・貫之像

岩佐又兵衛筆

挿図3

点では、この文書の書体は、書簡よりむしろ歌賛の方に近い。といっても、歌賛の奔放な書風に比べると、文書の書体は几帳面で硬い。しかしながら、文書の末尾のあたりに至って、運筆にかなり自由さが出て来ると、筆線の性格、文字の形態と、その配字のリズムに非常に共通した個性的な要素を認めることが出来る。

このように見てくると、法雲寺文書は、歌賛と書簡の筆跡をつなぐ、いわば橋渡しのような役を果すものであることがわかる。さきにのべたような書簡中の同一字句との類

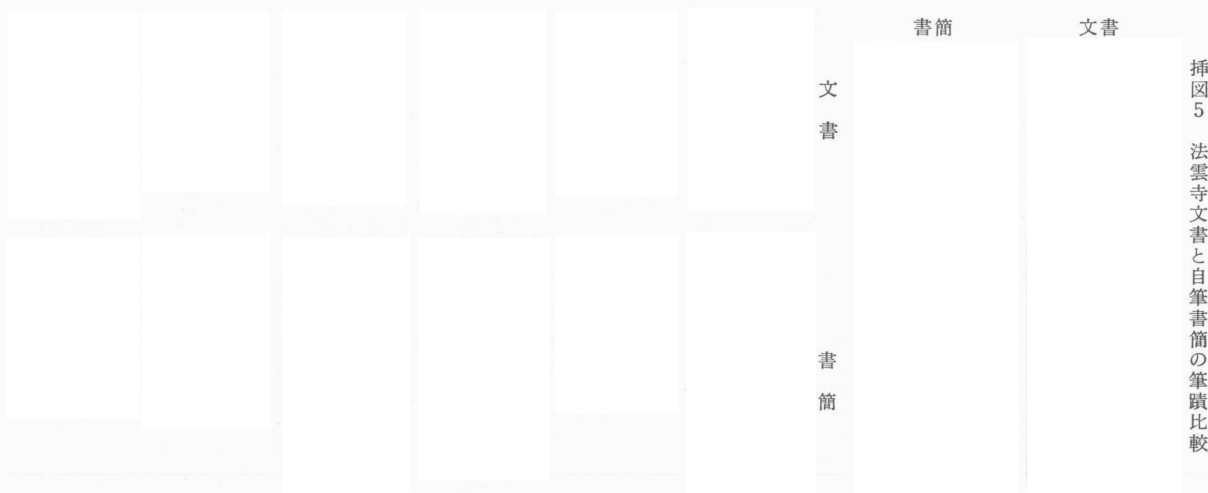
似をも考え合せると、この文書の筆跡が又兵衛自身のものである可能性は非常に大きいと言わねばならない。

この点を更に確認できるものとして、特にその重要性を指摘したいのは、さきに挙げた「廻国道之記」である。又兵衛自筆と伝えられるこの道中記の冊子本は、明治三十一年の国華で全文が紹介された後、米国に渡ったらしい。高見

ほどの一致を示している、という点である。とくに「跡」「習」「者」「聞」「存知」「数」「大」といった、両者共通の字を比べると、字形、運筆の癖が殆んど完全に一致している。瀧精一博士は、国華三〇三号（大正四年八月）において、^{註9}この「道之記」にふれ、「原本は又兵衛の自筆なりしが、今ま岩佐平造氏の家に伝わるものは其写本なり、原本は樫尾氏が人に与えたりしたものの中に在り

熱海美術館蔵 簡筆書自衛兵又佐岩 挿図4

沢忠雄氏の御記憶によれば、氏が昭和二年頃米国にあった折、シカゴの画商、森氏から「廻国道之記」がモールズという人の所有に帰している、という事を聞かれたそうで、それを頼りにボストン美術館、シカゴの Art Institute に問合せを見たが、その所在はつかめなかった。^{註8}したがって、今のところこの筆跡についてうかがうことのできる唯一の資料といえば、わずかに「越前人物誌」所載の小さな網版挿図（挿図2）以外にはないわけである。ところで、この挿図を見て直ちにわかることは、その筆蹟が、法雲寺文書のそれと比べて文字の形態、字配り、運筆法から用筆の種類に至るまで、全くといってよい



挿図5 法雲寺文書と自筆書簡の筆蹟比較

しと想像せらる」と述べておられるが、これが写本である根拠についてはふれておられない。「人物誌」（明治四十五年刊）では「道之記」は斎藤謙（栗堂）氏所有となっているから、滝博士の記述は、ことによると、別に岩佐平造氏（分家）に伝わる写本があったことを意味するのも知れない。そして、本家にあったものが、樫尾氏、更に斎藤氏へそれから米国へと渡ったのかも知れないが、そのところの消息は不明である。ともあれ、斎藤氏が国華で紹介した「道之記」は、「越前人物誌」所載のものと同一であることには間違いないが、国華で紹介の際の記述によると、文頭と末尾及び中途の一部分を欠き、「是ヨリ紙一枚半磨滅シテ更ニ判読スル能ワス」という箇所も見受けられる。寛永頃には文人たちが旅行する際自筆の紀行文をのこすことが

一つの流行となっていたらしいことも考え合せれば、この「廻国道之記」はむしろ自筆原本である可能性が強いと考えられよう。このことは、ほかならぬ、新出の法雲寺文書の筆蹟との一致によって改めて裏付けられたのである。岩佐家とは元来縁故のない法雲寺に、全く偶然の事情によって伝えられたこの文書と、又兵衛自筆として岩佐家に伝わった「道之記」との筆蹟が奇しくも同一であれば、文書の筆蹟も「道之記」の筆蹟も、共に又兵衛のものであると解釈せざるを得ないわけである。法雲寺文書は寛永十年、「道之記」は寛永十四年の旅行の直後のものと考えられるから、両者の間のへだたりは少く、筆蹟の一致は当然であろう。ただ、惜しむらくは「道之記」が現在所在不明なため、充分な比較が出来ない点である。だが、これまでの検討によって、法雲寺文書の筆蹟が又兵衛自筆のものであることは、ほぼ確かめられたと思う。

最後に、この新出の文書の内容からうかがえる、寛永十年当時の福井における又兵衛の生活環境について考えよう。まず指摘できるのは、従来間接的な資料によるより他なかった又兵衛と福井藩との関係がこの文書により実証できたという点である。又兵衛が藩と無関係であり、その存在が藩主忠昌の与り知らぬところであったならば、畑中専修寺がこのような目安の代筆を彼に依頼する筈がない。むしろこの場合、畑中専修寺がその存廃にかかわるような重大な訴訟に際して、特に又兵衛に代筆役を依頼したことの背後には、又兵衛が忠昌に相当な信用があったこと、京出身の文化人として福井では知名な存在であったことが推測されるのである。

つぎに問題となるのは、又兵衛がこのような役を引受けるようになった事情であるが、これについては具体的に知る手がかりを持たない。周知の如く、真宗の本願寺派と高田派とは朝倉義景時代、互に法敵として相許すべからざる間柄にあり、その対立関係は現在に至るまで尾を引いている根深いものであるという。地元ではこのような見地から、本願寺派の興宗寺に恩顧ある又兵衛が、

法敵である高田派の畑中専修寺のために一役買って出るということはあり得ないとし、この文書自体に疑問を持つ向きもあるようだ。だが、筆蹟検討の結果この文書の筆蹟が又兵衛のものであることがほぼ明らかになった以上、問題はこのような事実をいかに解釈するか、という点に置かれるべきであろう。この場合、又兵衛を福井に招いたと伝えられる興宗寺十世心願（これまで十一世といっていたのは誤り）が、同寺の過去帳によれば、寛永十年六月廿四日、すなわち、法雲寺文書の日附の約四ヶ月前に没していることに留意せねばなるまい。福井において彼が最も頼りにしていたパトロンの死は、名声の割りに不安定であった彼の生活を一層苦しいものにしたであろう。彼がこのような右筆の仕事に手を出した動機と、その事とは全く無関係ではあるまい。更に想像をたくましくすれば、世のおとろへのかなしさに（廻国道之記）余儀なく都を離れて不遇な生活を送っていた彼が、窮地に陥っていた畑中専修寺の立場に同情して一役買って出たということも考えられよう。いずれにせよ、又兵衛が画業以外にこのような目安の代筆までもしていたという事実は、彼の知識の中の広さを示すと同時に、福井での彼の生活の多彩な様相の一端を示すものとして興味がある。

以上の検討の結果、この文書が、寛永十年における福井での又兵衛の事跡を示す直接資料として、また、彼の手跡を知る上での資料として、貴重なものであることが明らかにされたと思う。なお、この文書の出現によって、又兵衛自筆ということが改めて確認された「廻国道之記」の米国における所在が判明する日の近からんことが期待される。

本稿作成に当って、文書の読みは高橋龍三氏の御教えを受けた。筆跡の検討は伊東卓治氏の御意見によるところが多い。文書の形式・内容に関して笠原一男氏の御意見を伺うことができた。また、文書の内容に関する問合せに対して佐々木敏氏の熱心な御尽力があった。併せて感謝の意を表する。

註1 福井県立図書館佐々木敏氏の調査によると、西光寺は現在坂井郡金津町(旧坪江村)中川に、専福寺は大野市友兼にあり、共に昔から高田派に属していた。

註2 「筆者」の用語例としては、兼見卿記、天正十二年十二月八日の条に「……民部卿法印ヨリ使者、筆者磯辺入道来云……」とあり。この磯辺李斎は「正法山妙心禅寺米銭納下帳」中にも「式百文 但十一月分什落 磯部玄以筆者」として記入されている(大日本史料所載)。

註3 但し文頭に後から書き加えられたと思われる「謹言上……」の行だけは他筆かも知れない。

註4 又兵衛が興宗寺と深い縁故にあったことは、元和三年に遡る同寺の過去帳に岩佐家代々の命日が記入されていたこと(現在のその写しが残る)、現在も同寺に岩佐家の墓(刻銘からして安永以後のものと考えられる)が残っていることからうかがえる。同寺の現住職北条鏡然氏の談によれば、同寺が今次大戦で焼失するまでは、「人物誌」に記された杉戸絵がまだ残っていたとの事である。

註5 細見良氏蔵「官女観菊図」の箱中に添状として「勝以画口述伝来書」なるものあり(全文は矢田三千男氏刊行の「彩雲」にてている)、それによると、秀康の三男(二男とあるは誤り)直政(慶長六寛文六11601166)が成人の後、直政養育に功のあった福井の豪商金谷家の主人を松江の城に招いて厚くもてなしたが、またその折秀康からも礼として又兵衛畫十二枚を賜わったとある。秀康は慶長十二年に没しているから、彼から賜わったのでなく、直政から賜わったとすれば辻褄が合う。この金谷家は、恐らく現在福井市呉服町一七〇一金谷喜治郎氏がその後裔に当るものと考えられる。金谷家はもと福井市の近郊旧鳴鹿村金谷にあつて酒商を営む富豪であつた。この口伝書はこの十二枚押絵貼屏風が金谷家から福井の小川家に渡る際につくられたものであるが、その内容はかなり信頼性あるものと考えてよく、この屏風が古くから福井にあつたことには間違いないまい。

註6 この機会に、佐々木敏氏の御協力を得て、国事叢記、片疊記など福井藩関係の資料に当つて見たが、彼の名前を存命当時の史料に見出すことができなかった。わずかに、「続片疊記上」の宰相忠直公御給帳(三三七頁)のところに「岩佐市兵衛」とあるのが注目されるくらいである(佐々木氏の御教示による)。

註7 このほかに上野家蔵の伝又兵衛筆三十六歌仙画冊の歌仙名を書き入れた文字が

重要である。この筆蹟は春山武松氏によつて、人麻呂・貫之像の歌賛と同じ筆癖を持つていることが正当に指摘されている(「又兵衛論争の渦中に」大塚博士還暦記念論文集所載)。絵もまた春山氏の説かれたように又兵衛のものであることに間違いなく、しかもかなり若描きであり、かれの面目を発揮した異色あるものと思われるのであるが、まだ実物を調査する機会に恵まれていないので今回の検討にはとり上げない。川越東照宮の歌仙画額の裏に金泥で書かれた有名な署名、「職人尽図巻」の末尾にある「勝以図之」の落款は、ともに陪体で書かれた、个性的特徴を欠くものであり、とくに、職人尽図巻の場合は、勝以二人説の問題もからむので、ここでは資料に加えなかった。

註8 上野アキ氏並に Mrs. Hauge の御配慮により、The Art Institute of Chicago の Miss Margaret Gentles に、「モリス氏」について調査して戴くことが出来た。それによると森氏が出入していた Charles J. Morse 氏が該当すると考えられるが、氏のコレクションは子息の未亡人の手によつて Hartford Museum, New York の Warren Cox 氏その他に寄贈もしくは譲られて分散しており、「道之記」について心当りの人はいないとの事であつた。

註9 滝精一「岩佐又兵衛自画像に就て」(国華三〇三)
註10 作例として、小堀遠州の「元和七季都路旅の記」(大日本史料12—38所載)、徳永種久の署名花押ある「徳永日記」(元和三年、高野辰之「江戸文学史」所載)などがある。

法雲寺蔵 岩佐又兵衛文書全文

謹言上高田専修寺理りの御事

西光寺
専福寺

一、下野國高田専修寺住持職之御事高祖親鸞上人

ヨリ當寺ノ嫡祖眞佛上人に御傳受之佛法ニ而御座候

開山ヨリ十代目ヲ眞惠法印ト申候其御子大納言殿

高祖 法名應眞ト申御房法儀ニハ聊不染心唯武勇ノ

心懸ノミニテ御座候ニ依テ父法印佛法相傳も無御座
血脉ヲモ渡シ不被申候テ血脉ヲハ當國ノ西林坊ト申
仁ニ預ケ置被申候後應眞終俗儀之志不止候而二度
佛法カヘリ見聞敷トノ自筆自判之書物ヲ被致永正
八年に隱居被致候此時家徳ヲ離被申候御事

一、右之段ニ御座候ニ依テ諸末寺諸門徒應眞ノ意を
伺ひ常盤井ノ宮様ヲ申請則高田専修寺眞智

上人ニなし申御跡目ニ定置被申候テ時永正九年
於 帝都此旨奉仕 奏聞之處ニ 柏原之法皇御
綸旨并御勅書ヲ眞智上人頂戴被仕候其御綸旨
於于今當寺ニ御座候御事

一、然所ニ彼應眞御房隱居后後悔ニ被存都ニ上リ右之段々
様ノニ申返シ御綸旨頂戴被申ニ依テ當寺ノ末流
三河國明眼寺越前國勝慢寺兩人上洛被仕右之様子共
奉仕 奏聞所ニ速被爲 聞召分應眞房へ被下候
御綸旨ヲハ永代被爲成 奇破候トノ奇破之御綸旨
重而眞智上人頂戴被申下野國高田専修寺へ歸
國被致候其國之屋形宇都宮殿御請狀ヲモ被蒙候
其後當國へ被罷越右ニ西林坊預リ被置候血脉傳法
速請取被申候眞智上人ヨリ當専修寺眞教上人
迄ハ四代目ニ而血脉傳受請來被申候於于今下野國
高田ヲモ當寺ヨリ支配被致候上ハ高田一流ノ本寺
其紛無御座候御事

一、一身田ト申寺ハ右之眞惠法印勢州に隱居有テ
一寺ヲ志め無量寺ト號シ居住被申候應眞其跡
ヲ志め被申候永正八年ヨリ廿年ノ後飛鳥井殿

御子堯惠御房其通ヲ繼テ于今其通ニ御座候
雖然彼方ハ身ノ御才覺ヲ以世俗ヲ調對ニハ都モ
程近キニ依テ貴賤ノ會交心ニ被任候故自繁
榮ノ道場ト罷成候當寺ハ第一都遠境ノ地又ハ
奥深所成ニ依テ左様成仕合モ無御座候然共古ヨリ
ノ靈地ニ而御座候故于今其通ニ而罷在被申候御事
一、唯今も於 天下其沙汰被致候ハハ嫡傳之佛法血
脉傳法ノ旨殊ニハ 御綸旨共并光嚴院殿之

御書其外御朱印等數通之證文を以被申上候者
明鏡ニ可被爲 仰付被存候へ共惣而佛法ノ宗門ハ
人ノ心ニ依テ思付申習ニ御座候物ヲ何ソ威儀
ヲ以宗徒ヲ隨せ候事無益之道理ト被存いつとても
隱便之躰ニ而過來申候處ニ結句一身田ヨリかゝる
新キ事被申候我等共一圓合點不參候御事

宗門

一、右之次第共能承届申サヌ者ハいつとなく二にわかれ候と
斗存知又世上ニハ唯おもてうらの様に思召多年双方
共ニカケカマワス過來リ申候ニ今更かやうの儀聊分別に
あたひ不申候殊ニ我等兩人ハ於當國古より當寺ノ末寺
ニテ御座候へハ佛法相傳血脉ノ御在所ニ而佛法外ニ無
唯當寺コソ高田一宗之御本寺ト奉仰候依是遠
國遠堺ヨリサへ御本寺ト仰キ數多ノ末寺おゝくノ門
徒參詣ヲナシ申候ニ我等共當國ニ罷在剩右之嫡傳等
能存知候上ハ一身田へノ事中ノ存モヨリ不申候 大閤様
之御代ニモかやうの出入御座候つれ共右之通ニ依テ終ニ
一身田へハ付隨不申候御事

一、權現様之御代 (台) 大德院様ノ御代にもかやうの儀

聊不被申候ニ今更何たる事之發候而かゝる不思儀
成事被申懸候哉我等共少も合點參不申候御事

右之条ニ而御座候間乍恐此旨宜被爲 聞召

分此上ヲ以彼方へ御返事被爲 仰遣候而被下候ハハ
忝可奉存候仍如件

寛永拾年酉之拾月廿八日

越前國福居庄

松平宰相殿江言上申候目安之跡書

筆者 岩佐又兵衛

図版要項

- 一 金色堂 中央壇格狭間 岩手 中 尊 寺
- 二 同 左 壇格狭間 同
- 三 同 右 壇格狭間 同
- 四 同 中央壇蓮瓣及蕊金具 同
- 同 左 壇蓮瓣及蕊金具 同
- 同 右 壇蓮瓣及蕊金具 同
- 五 大日如来坐像 岩手 瑠 璃 光 院
- 木造像高 五六・五センチ
- 六 騎獅文殊菩薩及眷属像 岩手 中 尊 寺
- 木造像高 中尊 七〇・六センチ
優填王(向つて左) 七五・七センチ
善財童子(向つて右) 五七センチ
婆藪仙(左後) 七五・四センチ
仏陀婆利三藏(右後) 七〇センチ
- 七 一字金輪大日如来坐像 岩手 中尊寺外十七箇院
- 木造像高 七六センチ
- 一一七 久野健「中尊寺彫刻とその周辺 中」参照
- 八 岩佐又兵衛文書 部分 福井 法 雲 寺 藏
- 紙本墨書 縦 二五センチ
横 約一〇二センチ

研究資料 辻惟雄「福井県法雲寺藏の岩佐又兵衛関係文書」参照